



学生時代と図書館58

—我が資料の宝庫—



森島 一雄



新入生の学外オリエンテーションでよく「充実した学生生活を送るには、図書館を活用することが大事です」といった話をするが、私自身、図書館の重要性を実感するようになるまでかなりの時間が経過したように思える。大学に入学した当初は開架式と閉架式の違いも知らず、閲覧室にある図書が全蔵書であると思い込んでいたくらいであったから、図書館の利用もせいぜい授業の合間に閲覧室で時間を潰す程度であった。

ある時、デンマークの言語学者・英語学者の O. Jespersen の *The Philosophy of Grammar* だったと思うが、閲覧室に見当たらなかったので図書館員に聞いたところ、しばらくして奥から古めかしい本を出してこられた。このとき初めて蔵書の大部分が書庫にあるということを知ったのであるが、それでも図書館に入り浸りになったという記憶はない。

転機が訪れたのはハワイ大学で言語学専攻の大学院生として過ごす機会が与えられた時であった。寮に入ったところ、二人一部屋で勉強に集中できないだけでなくルームメイトが早寝だったため気が引けて思うように電気がつけられず、やむなく図書館で勉強しなければならなくなった。当時の図書館の開館時間は午前7時半から午後10時半までで、書架の間にはいくつものブースが置いてあって、図書館でよく見かける大きな机は一部の場所にしかなかった。このブースは前と両側が板で仕切られているため他の利用者の姿は見え、また、自分の姿も背中しか見られることはないため完全に自分の世界に没頭することができた。キャンパスは広いけれど所属していた言語学科の建物から図書館まで近かったので、寮はほとんど寝るだけにして授業の合間も図書館を利用することにした。最初はブースの中で授業の教科書を読む程度であったが徐々に利用する図書の数も増え、週末などはひっそりとした図書館の雰囲気を楽しんだものである。この頃から私にとって図書館は必要欠くべからざるものになったのだと思う。

最初の秋学期を何とか奨学金を維持できるGPAでクリアできたのも図書館のお陰である。春学期のときに論文の中には、言語理論の妥当性を証明するために都合のよいデータだけを並べたように思えるものがあることに気づいた。そんな折、ある先生が「どんなに素晴らしい言語理論でも100年もすれば古くなる。その点、資料は理論が変わってもその価値が低下することはない。」と言われた。例外や間違いといわれるものを生み出すところにも人間の言葉の本質があるとすれば、数学的・科学的な原理だけではどうしても処理しきれないものが自然言語にあるはずだと思うようになると、理論よりも資料の重要性を認識するようになり、図書館も徐々に資料収集を念頭に利用するようになった。

興味の対象が音変化のメカニズムの解明に向かうようになると、綴り字の変化、英詩脚韻、正音学者の言説、方言、同族言語との比較などに関する資料が不可欠となってきた。そのため、オックスフォード大学のBodleian Library や大英博物館図書館など複数の機関を一つの組織にまとめたThe British Libraryを利用させていただくようになったのも自然の成り行きだったのだと思う。後者の図書館は世界有数の印刷本、写本、マグナ・カルタのような歴史上きわめて重要な位置をしめるものや手稿、地図、楽譜などを所蔵している資料の至宝で、学問的関心と好奇心を持つすべての人に利用を提供している。本学の図書館も50万冊近くの図書と多数の学術雑誌を所蔵し、貴重な資料の宝庫となっている。図書館の利用目的は各自違おうであろうが、活用すればするほど図書館の重要性が実感でき有意義な学生生活が過ごせるものと確信し、毎年、新入生の学外オリエンテーション時に図書館について言及するしだいである。

もりしま かずお (教授・英語学)